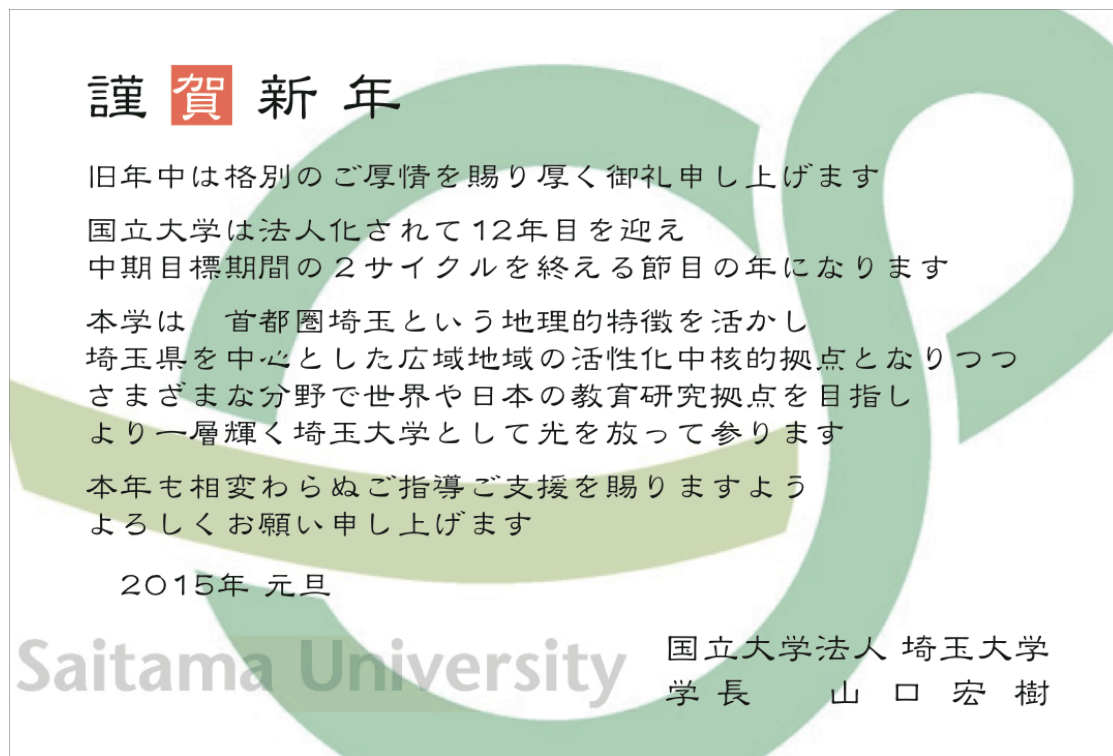


2015年の年頭に当たって：

地域活性化の中核となり、世界/日本の教育研究拠点として光を放つ



(2015年 学長 official 年賀状)

新年 明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ致します。

さあ、2015年の幕開けです。国立大学は法人化されて12年目を迎え、中期目標期間の2サイクルを終える節目の年となります。と同時に、激動が待ち構える第3期中期目標期間の方向性を決める重大な年でもあります。厳しい現状を認識しつつ、明日に繋がる明るい希望を抱いて、新しい年のスタートを切りたく思います。

国立大学を取り巻く現状

昨年末の12月17日、産業競争力会議の新陳代謝・イノベーションWG第4回会議が開催され、下村文部科学大臣から「イノベーションの観点からの大学改革に関する基本的方向性」について説明がなされるとともに、文部科学省から「イノベーションの観点からの大学改革の基本的な考え方(案)」が示されました。我が国の中長期の経済成長を持続的に実現する上で、これまで以上に大学の知の創出機能の強化、イノベーション創出力の強化、人材育成機能の強化が求められ、大学改革の基本的な考え

方は二つです。

第一は、改革を進める大学への重点支援を通して大学の競争を活性化するために、客観的な評価指標の導入による評価プロセスの透明性の向上と評価結果の資金配分への反映を行い、各大学の強み、特色、社会的役割を踏まえた機能強化を図ること。

第二は、グローバル競争を勝ち抜くため、新たに、世界の研究大学と競争する特定研究大学制度を創設し、日本の将来を担う優秀な人材を育成する卓越大学院、卓越研究員制度を創設することです。

いずれも「競争」が keyword ですが、特に前者は、第3期中期目標期間における運営費交付金の見直しに関連し、その基本的方向性が確定しつつあって極めて重要です。具体的には、国立大学が多様な役割を果たしていることを踏まえ、第3期中期目標期間においては、国立大学を三つの類型に分けた上で予算措置や評価をきめ細かく行い、大学としての機能強化を図るとのことです。その3類型とは①地域活性化・特定分野重点支援大学、②特定分野重点支援大学、③世界最高水準の教育研究重点支援大学です。各国立大学は、重点的に取り組むためのいずれかの類型を選択し、自ら選択した類型ごとに、機能強化の取組に応じて、運営費交付金の重点支援を受けることとなります。なお、各大学の改革の取組への配分及びその影響を受ける総額は、運営費交付金の3～4割とされており、評価に基づき配分される運営費交付金の最終的な金額に大きく影響してきます。

埼玉大学の方向性

埼玉大学としても、この類型に関して一つの大きな決断を強いられます。しかし、埼玉大学の規模・状況やミッションを客観的に捉え、また、現在、補助金を得て進めている「学部の枠を越えた再編・連携による大学改革～ミッションの再定義に基づく研究力と人材育成の強化～」や、平成27年度特別経費で計画している「埼玉大学と地域産官金との双方向コミットメントによる、社会で活躍する理工系博士人材の育成機能強化」など、この1年の自らの改革の動きを考えれば、決して難しい決断ではありません。積極的に、第1の類型「地域活性化・特定分野重点支援大学」を選択し、改革に取り組む大学として支援を受け、より安定的な取組を推進していきます。ただし、この重点的な支援は、取組の状況や実績の評価の結果を運営費交付金の配分に反映させる形で行われ、各類型で競争が促進されるようになりますので、埼玉大学にあ

っては、役員、教員、そして職員が意識を共有し、一丸となって、「役教職協働」による真に積極的な対応が必要です。

その際、評価指標には注意が必要です。詳細の評価項目は引き続き検討されるのですが、全国立大学共通の指標としてIR(インスティテューショナル・リサーチ)の活用状況、地域活性化に係る指標として地域ニーズに応じた人材育成や地域連携の状況などが例示されています。首都東京に隣接する埼玉という、「弱点」ともなりかねない地理的特殊性を「強み」に転ずるようなIRと、ステークホルダーを明確にしてニーズを客観的に示す指標設定を仕掛けていかなければなりません。

埼玉大学の現状と将来に繋げる対応

以上のように、第3期中期目標中期計画の策定は大変重要になります。現在、学長室にてプロジェクトチームを編成し、埼玉大学のブランドや個性をより一層明確にしつつ、その検討を鋭意進めているところです。そこで掲げる大学の基本的な目標は、上述の類型選択と関連して、「首都圏埼玉という地理的特長を活かし、埼玉県を中心とした広域地域の、グローバルを目指した活性化中核拠点となりつつ、様々な分野で世界や日本の教育研究拠点としてより一層輝く」ことです。この基本的目標に関する十分な理解をみなさんにも是非共有して頂きたいと思えます。

さらに学長室では、もう一つの最重要事項として埼玉大学の財政問題を取り上げ、財政再建アクション検討プロジェクトチームにおいて検討を進めています。この背景には、上述のような、ややもすると大幅減に繋がりがかねない運営費交付金配分の不確定性のみならず、人事院勧告に準拠した場合の人件費の増大や基本料金値上げによる光熱水費の増大、さらには消費税率のアップによる物件費の増大など、支出の大幅増が見込まれることによる危機感があります。検討は、最悪のシナリオを仮定した収支シミュレーション、収入増大策、支出抑制策、予算編成・配分方法などの財政構造改革だけではなく、人件費の大幅抑制を余儀なくされた場合の定員削減をも視野に入れ、事務組織の大胆な改組や人的資源の再配置を含めた業務改革など、多岐に亘ります。経費削減や業務改善については、これまでも何度も検討されてきたものの効果的には実現できていません。この財政危機というピンチをチャンスと捉え、学長のリーダーシップにより財政構造改革と業務改革を断行して、財政および業務に、そしてさらには教育研究に好循環をもたらしていきたいと思えます。

なお、産業競争力会議で示された資料では、運営費交付金の配分について、現在の大学改革促進係数を見直した新たな係数により捻出した財源を重点配分枠として、改革取組状況の評価に基づき、二つの区分ごとに各大学に配分するとしています。その二つとは、①各大学の機能強化の方向性を踏まえた改革の取組状況に基づく配分、および②大学のビジョンによる取組状況の評価に基づく配分であり、後者は学内資源再配分における学長のリーダーシップ強化を促進する経費とされています。

2015年、未年にちなんだ言葉として「多岐亡羊」という言葉があることを知りました。「大きな道では分岐・枝道が多く、逃げた羊の行方がわからなくなる」が文字通りですが、方針が多過ぎ思案に迷うことの喩えで、「学問も仕事もあれこれ手を出さず、本質を見極め根本の理だけを追求することの大切さを説いている」とのことです。

私はこの「多岐亡羊」の意味をしっかりと胸に、今年もみなさんのご理解とご協力を得て、埼玉大学を Dynamic に動かし、改革を進めます。そして、学長としての official な年賀状にも書いた言葉：「埼玉大学は、首都圏埼玉という地理的特徴を活かし、埼玉県を中心とした広域地域の活性化中核的拠点となりつつ、さまざまな分野で世界や日本の教育研究拠点を目指し、より一層輝く埼玉大学として光を放つ」ことを着実に実現させていきます。

学 長 山口 宏 樹